東京外国語大学
留学生日本語教育センター論集　41：185～200，2015

日本語学習者の作文から考える 日本語の主題 / 主語の省略

宮島　敦子

【キーワード】 主題、省略条件、中上級日本語、述語、母語、テキストタイプ

1．はじめに

日本語学習者の作文を添削していて、気になることの一つは文の主題、あるいは主語が不適切に省略されて　文が何について述べているのか理解するのが難しい文がしばしばあることである。

例えば、下記（1a）の第2、第3文では主題の「彼女は」が、（1b）の第2文では主題の「その日の料理は」が省略されている。このことにより、各文は「何か物足りない感じがする」、あるいは「意味が分かりにくい」文になっている[1]。

（1）a. アメリはこの時、はじめて世界と調和が取れた気がした。それから、もっとたくさんの人たちを助けてい（っ）た。ある日、彼を見つけた[2]。
　　b. 月曜日は大部分の家族でお昼ご飯に豆一皿をたべることになっています。だいたい、二つの伝統的な豆料理から選ばれます。

日本語を学ぶ学生に文法、作文指導を行う立場からは主題、主語の省略、非省略の規則について説明、指導を行うべきであるが その規則性を筆者自身が十分に理解しておらず、該当文の主題 / 主語の省略の是非を日本語話者の直感でのみ指

---

[1] （1a）は2014 春学期に担当した511中上級文法・語彙クラスで期末試験の一部として学生に課した作文の一つである。なお、本研究での使用については学習者に了解を得ている。（1b）の作文は『JLPTUFS作文コーパス』（2011 東京外国語大学留学生日本語センター）の中の500レベルの作文からとった。500レベルを観察の対象とした理由は筆者がこのレベルの学生を指導する機会が多いこと、又、留学生日本語教育センターで中上級と位置づけられる500レベルの文章表現の習得目標には「アカデミックな文章にふさわしい語彙、文型、表現、文体を選択」できること（2014 東京外国語大学留学生日本語教育センター）が掲げられているので 読者に理解されやすい文が書ける様に指導すること、をこのレベルで心掛けることが重要である、と考えるためである。

[2] 原文に間違いがあり、そのままでは分かりにくい場合、（　）で正しい表現を補う。

導している。従って本稿では日本語における主題 / 主語の省略についての法則性を考察し、併せて、学習者にこれをどの様に指導をするべきかについて考えたい。

2. 先行研究

2. 1 石黒、筒井(2009)

日本語教育の観点からは　日本語学習者は必要以上に明示的に主題 / 主語を表すのでこれを指導する必要がある、と主張する意見が多い様であるが (cf. 曾 2005)、石黒、筒井 (2009) は文章表現のテキストの中で、以下の文では主題が省略されているために文の意味がわかりにくくなっていることを指摘し、文意が理解しやすくなるように 2 番目の文の主題である「私は」を明確に表すように指導している。

(2) 満員電車の中で足を踏まれた。ギャーという声を上げた。(石黒、筒井 2009 : 118)

日本語教育を行う、という立場では筆者は石黒、筒井に賛同し、学習者が文意が理解しやすい文を書くことができる様になる為の指導を心掛けたい。

2. 2 三上(1960)

日本語学の立場からは　主題の省略について三上 (1960) は「『X ハ』はピリオド (マル、句点) を超えて次々の文まで及んでいく」ことができるとし、以下の様に談話の中で 2 番目以降の文では主題が省略されている例を示している。
(以降、省略されている主題は＜φは＞と表し、＜φは＞の先行詞となっている主題 / 主語は〰〰で示す。(3) では三上の文に筆者が〰〰と＜φは＞を加えた。)

(3) 父ハ茶ノ間ヘハイラナカッタ。＜φは＞隣リノ間二座ツタ。(三上 1960 : 117)

2. 3 砂川(1990)

小説作品を研究対象とし、「主題 (「は」で示される名詞) の提示と省略の談話構成における機能」について考察した砂川 (1990) は　主題の提示には以下の三つの方法があると述べている。

(4) 主題提示の方法

主題の省略：主題が明示的に言及されずに提示されている。

主題の義務的明示：省略すると主題が読み取れなくなるので　明示的に言及しなければならない

主題の非省略：省略しても主題を読み取れるので省略は可能であるが何らかの理由で「は」によって示される主題提示が行われている。

そして　砂川は主題の省略が許される為には　省略されたものが何を指し示しているのかが読み手に理解可能である、つまり、省略されたものの復元を行える条件が整っていなければならないとし主題の省略の条件として以下を挙げている。

(5) 主題省略の条件[3]

① 主題の指示物が直前の文で主語の位置を占めている。

② 主題の指示物が主語の位置を占めていなくても直前の分裂文で主語的な役割で表されている。

③ 直前の文で主題として明示されている

しかし、主題省略の為の (5) ①―③の条件を満たしていても主題を省略しない方が文の理解上好ましい場合がある。砂川はこれを「主題の非省略」と呼ぶ。砂川によれば「主題の非省略」は ①主題の維持の為と②主題の再設定の為に行われる。

砂川は　①「主題の維持のための主題の非省略」がおきる原因として二つの文の間の (a) 時空間的ギャップにより設定されてしまう談話の境界　(b) 脈絡の不整合により生じる談話のとぎれ　(c) 語り様式の変化により生じる主題維持の困難　(d) 書き手の視点の変化により生じる主題維持の困難があると述べている。

---

[3] 上記 (5) ①-③のどれかを満たしていないと、(i) が示す様に主題は義務的に明示されなければならない。(i) で該当主題の「香具師たち」は前文で指示物が導入されているが前文中での役割が主題でも主語でもないので省略することはできない。

(i) 辰五郎は浅草境内の掃除方をつとめ、この一帯で商いをする香具師たちをとりしきっている。香具師たちは毎日おあがりの何割かを辰五郎におさめる。(砂川 1990:18)

しかし、この点について砂川は「ただし、直前の文で仮に主語以外の位置を占める名詞であったとしてもそれに続く文が名詞が表す人物の状態や、属性を描写したりするようなものであれば」「省略が可能になる。」と述べている。

((c) と (d) については　観察した作文の中に該当例が見られなかったことと、砂川の例にあいまいな部分があることから今回の考察からは外すこととする。)

①　(a) 時空間的ギャップにより談話に境界が設定されてしまうために　主題維持の為に行う「主語の非省略」は以下 (6) が示す。

(6) 舞阪永介は、協会の依頼でその講師を務めている。地方都市でも年に何回かはゼミが開かれるので、招ばれて出向くこともある。彼は過去2回ロンドンに留学して英連邦宝石学協会の学位をあたえられており、二年に一度、主にヨーロッパで開催される宝石学国際会議の正式メンバーにもなっている。(砂川 1990：15)

(6) では主題「彼は」を省略しても文の主題は前文主題の「舞阪永介」だと推量できる。だが主題復元が可能でも「彼は」という表現がないと「何か足りない」という違和感が残る。これは前文主題と該当主題は同一指示だが時間的ギャップで談話に境界が出来た為主題維持の為に主題明示が必要になった、と説明される。

① (b) 二つの文の間の脈絡の不整合により談話にとぎれが生じるために行う主題維持の為の「主語の非省略」は (7) で説明される。

(7) 脱落寸前で車をおさえながら僕は何度も同じことをくりかえした。そして＜φは＞やるたびに興味を覚えた。僕は帰ってから女の子が両親にいいつけはしないかということが心配だった。　(砂川 1990：15)

砂川 (1990) は (7) で第一文と第二文と同じ主題であるのに、第三文に主題「僕は」が明示されるのは　第二文も第三文も「僕」の心的状態を述べているがどういう心的状態であるか (行為への興味　行為への不安) という点で脈絡のギャップが生じているため、主題維持の為に主題を明示した方が好ましいと説明している。

②「主題の再設定の為」の主題の非省略については　砂川はこの場合は主題を省略しても談話の自然さを損なわないが　単に談話の細分化の為に主題を再設定する為に主題を明示することである、と説明している。(8) がこの例を示す。

(8) 僕は何よりも助かった、と思った。勝っちゃんの言うとおり、いま、家中がそのことでゴッタ返しているのなら、僕は帰りが遅れたことを誰にも気づか

れずにすむから。　（砂川 1990：23）

上記をまとめると砂川が提案する主題の省略の為の条件は以下である。

(9) 主題省略のための条件
① 該当主題の先行詞は直前の文で主題か主語である。
② 主語の位置を占めていなくても該当主題の先行詞は直前の分裂文で主語的な役割で表されている

(9) ①、②の条件を満たさない場合は主題は明示的に提示さればならない。しかし (9) ①②を満たしていても、以下の場合は主題明示が文理解の為に好ましい。

(10) 主題明示を好ましくする要因
① 主題の維持（以下の理由による）：
a) 時空間的ギャップにより談話の境界が設定されている
b) 脈絡の不整合により談話のとぎれが生じている
② 主題の再設定：（単に）談話の細分化のため

そして上記から本稿では主題省略に関して三つのタイプの文があると考える。

(11) 主題省略に関する文のタイプ
a. 主題省略が適切な文
b. 主題省略が不可能な文
c. 主題明示が好ましい文

本稿は砂川が提案する主題提示 / 省略に関する規則を基盤とし、(1) で提出した留学生の作文 2 点を資料とし考察を行う。

猶、本稿では主題（助詞「は」で示される名詞）のみならず、主語（助詞「が」で示される名詞）の省略についても考察する。 Kuroda (1972) が指摘する通り、主題 (topic) 及び主語の機能についての概念は時代、学派により異なり、現在でもこれらの用語の使い方は研究者により、異なるといってもいいほどだからである。

又、複文については　これを全体で一つの文とする考え方と、各々を文とする考え方があるが 本稿では「文とは一つの命題を表すもの」と規定し、便宜上、以下のような複文は各々、二つ(12a)と三つ(12b)の文を含むと考える。

(12)a. お父さんは医者なので　定期的にアメリの健康診断をする。
　　b. お父さんがアメリに健康診断をすると、彼女の心臓がはやくなって、お父さんはこれを心臓病と診断してしまった。

3. 考察

3.1　作文「アメリ」の観察及び考察

この作文は映画「アメリ」の筋を中国語話者の学習者が説明したものである。延べ数29文のうち主題の省略が妥当な文は8文だった。省略が不可能な文は10文だが　そのうちの1文で主題が省略されている。主題の明示が好ましい文は11文だが学習者はこのうちの7文で主題の省略を行っている。(以下、該当の主題/主語は下線で示す。)従って主題が不適切に省略されている文は全体の約1/3で、その為か、この作文は映画の筋を十分に伝えるが、少し舌足らずな印象である。

主題省略が妥当な8文のうちの3文で省略された主題は直前の文の主題と同一指示であり、主題省略の条件を満たしている。

又、省略が妥当な8文のうちの5例は(13)が示す様に複文の主文の主題であり、主文に先行している従属文の主題と同一指示である。

(13) アメリは家庭の暖かさを経験したことがなくて<φは>子供のころはずっとさびしかった。

以上の現象は砂川が指摘する様に、直前の文の主題との同一指示が主題省略の為の大切な条件であることを示している。これと表裏一体をなして、主題(主語)の省略が不可能な10文のうち、5文は(14)の様に談話に新しい指示物を主題(主語)として導入する文である。これらの主題は直前の文の主題と同一指示である、という主題省略の条件を満たさないだけでなく、主題が明示されなければその指示物も談話に導入されない。従って、文だけで談話[4]を構築する説明文(物語り文)

[4] 砂川(2005)は「談話」を「コミュニュケーションを行うための言葉の運用プロセス」と定義している。本稿は「談話」をこの意味で使う。

ではこれらの主題を省略することが不可能であることは当然である。

(14) a. アメリという人がいる。(作文全体の第一文)

又、主題省略が不可能な8文のうちの3文では(15)の様に、主題の指示物が直前の文の主語の指示物と異なっている。この場合、砂川が指摘するとおり、主題が明示されなければ文意は理解できないか理解しづらい。

(15) 1997年の夏　ダイアナ妃が自動車事故で亡くなった。アメリは人間の生命力の弱さを感じた。

学習者はこれらの主題を正しく明示している。動詞に豊かな屈折を持つ為、動詞の活用形から主語の指示対象を推測しやすい、所謂、pro-drop言語であるスペイン語では 日本語では主題の省略条件が考察の対象となるのとは逆に、どのような場合に主語が明示されるか、についての研究が盛んである。そして上記(15)の様に前文の主語と該当主語の指示対象が違っている時は主語を明示する傾向がある、と報告されている。(cf. Cameron 1992)「直前の文の主語(主題)と該当主語が同一指示でなければこれを明示する」というルールがpro-drop言語にもpro-drop言語ではない日本語にも中国語にも共通であるとすればこれは興味深い現象である。しかし、主題省略が不可能な文の1例では前文の主題と該当主題の指示物が違っているにも関わらず中国語話者の学習者は(16)のようにこの主題を省略していて、その為、文が何について述べているのか理解しづらくなっている。従って、上記のルールが中国語にもあてはまる、とは言えない様である。

(16) お父さんがアメリに健康検査すると、アメリの心臓(の鼓動)がはやくなってお父さんはこれを心臓病と診断してしまった。そして<φは>学校にも行かなくて友達も出来なかった。

この作文(談話)全体の主題はその題が表しているように、「アメリ」という女性であり、主題の指示物は談話に導入済みなので学習者はこれを文に明示的に表す必要がないと感じたのかもしれない。しかし、(16)では主題が省略されていることで　この文が何について述べているのか推測しづらい。このことは　少なくと

も日本語では談話全体の主題と同一指示であるより、直前の文の主題 / 主語と同一指示であることが　文の主題省略には重要であることを示している。中国語の主語省略の規則がどの様なものであるのか、この規則が　学習者が (16) の第二文の主題を省略していることに影響を与えているのかどうか興味深いところである。

学習者が主題を省略してしまった主題明示が望ましいもう一つの例は主文の主語と指示対象が違う複文の副詞節の主語である。しかしこの省略された主語の指示物は前文、前々文の主題と同一指示であり、複文を扱っていない砂川の枠組みだけではこの主語を省略できない理由が説明できない。

(17) アメリは家庭の暖かさを経験したことがなくて、子供のころはずっとさびしかった。＜φが＞八歳の時[5]、アメリのお母さんは (が)　事故で死んでしまった。

複文の主語、主題の省略は重要なテーマであるが (cf. 久野　1973)、本稿はこれについて考察する余裕がないので、現時点では以下を提案するにとどめる。

(18) 複文の従属文 (節) における主題 / 主語の省略の条件：
主文の主題と同一指示であること

直前の文の主題と同一指示であるが、主題の明示が好ましいと思われる例は 29 文中 11 文であるが、学習者はこのうちの 4 文で正しく主題を明示し、7 文では主題を省略している。以下は主題の明示が好ましい文の中で学習者が正しく主題を明示している文である。下線で示されている主題が省略された場合の状況を考えると、該当主題は直前の文の主題と同一指示なので　どの文においても主題を復元することは可能ではあるが、主題が明示されていないと「物足りない」感じがすることは否めない。

[5] 該当箇所は正しくは文ではなく名詞句と考えるべきであるが、「八歳だった時」とすることもできるので本稿では考察の為、観察対象に含めている。

(19) a. アメリが［φが］[6] 八歳の時、アメリのお母さんは事故で死んでしまった。さらにお父さんも悲しさでふさぎこんでしまった。お父さんは医者なので定期的にアメリの健康検査をする。

b. 1997年の夏、ダイアナ妃が自動車事故でなくなった。アメリは人間の生命力の弱さを感じた。その日からアメリは他の人を助け始めた。

2. 3 (10) で見たように砂川 (1990) は直前の文の主題と同一指示であるので主題の復元が可能であるにも関わらず「主題明示が好まし」くなる原因として

① a 時空間のギャップにより設定されてしまう談話の境界

b 脈絡の不整合により生じる談話の途切れ

をあげ、① a, b が原因で主題維持の必要が生じ主題明示が必要になるとしている。

又、砂川は主題の省略は談話の自然さを損なわないが　単に②談話を細分化するための主題明示もあり、これは単なる主題再設定である、としている。

上記 (19) に示されている文は① a 時空間のギャップにも① b. 文脈の不整合にもあたらず、文脈の細分化であると考えることが出来る。上記の様に砂川は（単に）文脈の細分化の為に明示された主題は省略されても談話の自然さに影響しないとしている。だが、上記 (19a,b) では主題が省略されると文は不自然になる。(19a,b) では主題明示の後に話題が転換されているので、本稿ではこのようなタイプの「明示が好ましい」主題の出現を (20) と規定する。

(20) 話題の転換のための主題の再設定

主題明示が好ましいが 主題が省略されてしまった例は7文であり、うち1例は以下の様に明らかに① a 時間のギャップにより主題の維持が必要な例である。

(21) そして　（アメリは）［φは］学校にも行かなくて　友達も出来なかった。
やっと＜φは＞大人になって 自分の生活を始めた。

---

[6] 文法的、語彙的, 談話的な誤りである箇所は読み易さの為に正しい形を示し原文で使われている表現を直後に［ ］で示す。ここでは「アメリが」が不適切に省略されていることを示す。

又、1例は以下が示す様に　①b 文脈の不整合により生じたギャップにより主題の維持が必要な例である、と考えられる。

(22) (アメリが［φ］) 八歳の時、アメリのお母さんは事故で死んでしまった。さらにお父さんも悲しさでふさぎこんでしまった。お父さんは医者なので定期的にアメリの健康検査をする。それ以外＜φは＞アメリとなかなかふれあわない。

興味深いことに「主題明示が好ましい」が主題が省略された7文のうち3文の述語は動詞「見つける」である。(うち1文の述語は「あげた」がつく複合動詞。)

(23) a. アメリは人間の生命力さを感じた。その日からアメリは他の人を助け始めた。＜φは＞偶然に［で］自分のマンションで誰かが残した箱を見つけた。
b. ＜φは＞この箱の主人を見つけてあげてあの (ママ) 主人が大変感動した。
c. それから (アメリは) もっとたくさんの人たちを［に］助けてい (っ) た。
ある日、＜φは＞彼をみつけた。いろいろがあって＜φは＞幸せになった。

上記の例ではいずれもアメリが何かを「見つけた」後に、新しいストーリー展開がある。従って、これらの例も上記の (19 a,b) と同じように話題転換の為の主題再設定をするために主題の明示が望ましい例、と考えることができる。

砂川は下記 (24) の下線の明示された主題は　時空間のギャップがある為に主題の維持のために明示されている、としている。しかし、この例は　むしろ、話題転換の為に主題の再設定を行うために明示されている、と考えるべきであろう。

(24) こう独り言を言いながら、マルイギンは銃に弾をこめ、ここで行われた悲劇の全てを知るため、あたり一帯を歩き回った。マルイギンは倒れた紅松のそばにバンドの切れたライフル銃を見つけた。安全装置がかかっていた。(砂川 1990：22)

上記の例が示す様に　談話の中で話題を転換し新しいエピソードを導入するには　新たに主題を再設定する為に主題を明示するのが好ましい様である。さらに

上記で見たように　話題転換を示す為に使われる幾つかの決まった述語があるようである。「見つける」はおそらくその典型的な述語である。又、(23a) を観察すると、「感じた」も新しいエピソードを導入する時に使う述語の様である。このことは主題明示には述語のタイプも影響していることを示し、興味深い。又、学習者に主題を明示すべき述語を示せれば、大きな学習効果を上げることができる。

主題の明示を好ましくする要因を　砂川の提案に若干の修正を加え、本稿では以下の様に考える。

(25) 主題の明示を好ましくする要因

① 以下の原因により主題の維持が必要な為

a) 時空間的ギャップにより設定されてしまう談話の境界

b) 脈絡の不整合により生じる談話のとぎれ

② 談話中の話題の変換のために主題を再設定するため：話題の変換はしばしば「見つける」「感じる」等の述語で示される。

3.2　作文「チリの豆料理を食べる日」についての観察及び考察

この作文は自国の食文化についてのスピーチを行うために書かれたスピーチ原稿であると思われる。また、自国がチリということでこの学習者の母語はおそらくは前章で pro-drop 言語として挙げたスペイン語である。

述べ数 40 文のうち、主題 / 主語の省略が適切な文は 13 文であり、このうちの 2 例のみが砂川のルール通りに直前の文の主題と同一指示であった。

また、(26) が示す様に 1 例は砂川が「分裂文の述語は主語の様な働きをするので直前の文の述語と主題が同一の指示物を指している」と述べる用例にあたる。

(26) 月曜日に白い豆料理を食べること［日］がチリ文化の習慣です。＜φでは＞
月曜日は大部分の家族でお昼ご飯に豆一皿分を食べることになっています。

残り 10 例のうちの 6 文で省略されている主題は「私は」でありこのうちの 4 例の述語が「と思います)」、1 例が「説明したい」という思考を表す述語であり、この「説明したい」を含め 2 例には一人称主語を前提とする接尾辞「たい」が含まれている。又、このうちの 1 文である (27) は 談話の始まりである作文の書き出しに使われている。このことは 一人称、あるいは「私は～と思います」という呼応

は談話（テキスト）の中に先行詞を持たなくてもよい、ということを示している。

(27) これから＜φ（私）は＞チリの食文化について話したいと思います。

又、13 文中の 5 文では無（不定）人称主語にあたる「人々」が省略されていた。

今まで見た様に、人前で発表することを前提としているスピーチ原稿における主題省略の規則は　文で構築する談話内で完結する物語り文における主題省略の規則とは違いがあるようである。一人称指示表現「私」が主題である「私は」という表現は　上記で見たようにテキスト内に先行詞を必要としない。そして下記 (28) が示す様に「無人称表現」も直前の文に先行詞を必要としていない。

(28) a. もう一つの豆料理は「つぶ豆」です。基本的にはこの料理の材料は以前のと同じですが、＜φは（人々は）＞ヌードルをトウモロコシにかえます。

b. さらにこの食べ物は割合安くて、豆料理の作り方も簡単です。
＜φが（人々が）＞ 全部の材料を鍋に入れて、一時間ぐらいにらせて（ママ）、味をかけて（ママ）、出来上がります。

上記の主題 / 主語である無人称表現の省略を許すのは談話ではなく、その統語的、意味的役割（θ role）が述語が指定する必須項（主語 /agent）であり　統語的にも意味的にもその存在が保障されているからである様に思われる。本作文で無人称主語の省略が多いのは学習者が主語が省略されることの多い pro-drop 言語のスペイン語母語話者である為かどうかは現時点ではわからない。無人称の省略については今後さらに観察していくことが必要である[7]。

主題 / 主語の省略が不可能で学習者も主題を省略していない 23 文が主題 / 主語を省略できない主な理由は　1) 指示物が談話に初めて登場する、2) 指示物が直前の文に出ているが主題 / 主語ではない、3) 以前に主題だったが直前の文の主題ではない、であり 1) については 12 例、2) には 2 例、3) には 8 例があり、学習者は砂川の提案するルールをよく守り主題 / 主語を正しく表している、と言える。又、下記 (29) の様に該当主題が意味的に直前の文の主題の部分である為、主題

[7] 三上 (1960) は（日本語の）無人称文を操作型、料理型と呼び、このタイプの文の主語は「我々一般」であるが、「それを言い表さないことによって、一般的操作であることをはっきりさせる」と述べている。

を表す表現を変えなければならず指示物が同じでも主題を削除できない例もあり興味深い。

(29) だいたい料理は［φ］二つの伝統的な豆料理の作り方から選ばれます。一つは「手綱をかけた豆」という料理です。

主題 / 主語の省略が不可能な文の 4 例で学習者は主題を省略し、その結果、文の意味が理解しにくくなっている。以下そのうちの 3 例を示す。

(30) a. 月曜日は白い豆を食べること［日］がチリ文化の習慣です。月曜日は大部分の家族でお昼ご飯に豆［料理］一皿を食べることになっています。＜φは＞ だいたい、ふたつの伝統的な豆料理の作り方から選ばれます。

b. もう一つの豆料理は「つぶ豆」です。基本的にはこの料理の材料は以前のと同じですが、ヌードルをとうもろこしに変えます。＜φは＞とうもろこしのつぶから「つぶ豆」と呼ばれます。

c. 豆やとうもろこしや南瓜といった材料は南米発祥の食べ物です。＜φは＞もう征服される前から原住民に使われて、植民された後でも（人々は）（これを）使いつつき（ママ）ました。

興味深いことは学習者が不適切に主題を省略している 4 文のうち上記の 3 文で述語が受け身文になっていることである。さらに (30c) では省略された主題は直前の文でも主題であり、「主題省略」の規則からは省略しても問題もがないはずであるにも関わらず、これらの主題が省略されていると文は理解しづらい。「受け身文の主題が省略されると文の意味が取りづらくなる」、というこの現象に関しては、これらの文の直前の文は受け身文ではないので「日本語では直前の文と文の態が変わると、主題を省略し難くなる」という予測が成り立つ。又、(30) が示す様に、スペイン語母語話者が書いた本作文では、受け身文の主題はすべて省略されていた。この点に関してスペイン語話者に聞いたが、スペイン語では (SER) 受け身文では主題を明示しないことが一般的である、との答えだった。従って、この学習者に受け身文で主題を省略する傾向があるのは母語の影響によるものなのかもしれない。さらに (30a) では省略された主題の指示対象（豆料理）が目的語として直前の文に表れていることを考えれば、pro-drop 言語のスペイン語では

「主題省略のためには直前の文に（主題／主語でなくても）先行詞があればよく」又、Gili Gaya（1943）が述べる様にスペイン語では主語（主題）は、a）強調かb）あいまいさの回避の為にのみ現れると考えることもできる。しかしこの点についてはさらに観察が必要である。

この作文の観察からは1）スピーチ原稿など、話し言葉の要素がある談話（文）では主題省略の条件が物語り文の様な書き言葉だけで完結する談話と違っていること、2）pro-drop言語であるスペイン語を母語とする学習者には無人称主語、受け身文の主題を省略する傾向があるようであること、3）主題／主語省略の実行にはかなり母語の影響があるようであることがわかった。

4. 結語

本稿は文の主題の省略／非省略を決定する条件について砂川（1990）の提案に基づき留学生の作文の観察をもとに考察した。結果、1）物語文の様な書き言葉だけで完結する作文で使われる文とスピーチ原稿の様な話し言葉の要素が存する作文に使われる文とでは主題省略の条件が違っていること、2）「見つける」の様に　談話の中での話題の転換を示し、主題提示を促進する述語があること、又、3）主題省略の規則にはおそらく言語間で違いがあり、4）母国語の主題省略の規則が日本語学習者の主題の省略にも影響を与えている様であることが観察された。

現時点までの観察に基づき、本稿は中上級レベルの日本語学習者に対し、主題省略の仕方について（31）の様に指導することを提案する。

（31）文の主題省略についての日本語学習者への指導

1）該当主題の指示物が直前の文の主題か主語と同一指示でなければ、主題は省略してはいけない。

2）又、例え1）を満たしていても以下の場合、主題は省略してはいけない。

① 該当主題を含む文と直前の文が表す内容の間にa時間的隔たりがあるかb脈絡の途切れがある。

② 該当主題を含む文の述語が「見つけた」等の話題の転換を示す述語である。

3）話し言葉では「私は」は省略してもよい。

参考文献

石黒圭・筒井千絵（2009）『留学生のためのここが大切　文章表現のルール』スリーエーネットワーク

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

砂川有里子（1990）「主題の省略と非省略」筑波大学　文芸言語研究　言語編 18, p15-30

砂川有里子（2005）『文法と談話の接点　日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版

曾　儀婷（2005）「日本語における主題の省略・非省略について」広島大学大学院国際経略研究家国際協力研究誌　第 11 巻第 1 号 p175-183

東京外国語大学留学生日本語教育センター（2014）「全学日本語 Can-do リスト」内部資料

三上章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版

Cameron, Richard（1992）“Pronominal and null subject variation in Spanish: Constraints, dialects and functional compensation.” Doctoral thesis, University of Pennsylvania

Gili Gaya, Samuel（1943）Curso superior de sintaxs española. Barcelona: Biblograf, 15ª edition 1991

Kuroda, S.Y.（1972）“The categorical and the thetic judgment.” *Foundation of Language* 9:153-185.

《コーパス》

東京外国語大学留学生日本語教育センター　教育研究開発プロジェクト（2011）『JLPTUFS 作文コーパス：東京外国語大学「全学日本語プログラム」日本語学習者作文コーパス』

On the deletion of sentence topics in Japanese compositions written by foreign students

MIYAJIMA Atsuko

One of the problems in compositions written by students who are learning Japanese as their second language is that it is sometimes difficult to understand the meaning of the sentences as the students tend to delete the sentence topics (i.e. the subject) excessively. As a Japanese teacher, I would like to teach them the rules of when to delete sentence topics. However, this problem has not studied well. Therefore, this paper analyzes two compositions written by foreign students learning Japanese as their second language, based on the "topic deletion rules" proposed by Sunagawa (1990).

Through the investigation, I conclude that in Japanese, we can delete the topic of a sentence when its referent is the same as that of the topic or subject of the preceding sentence. However, when there is a spatiotemporal or logical gap between the sentence and the preceding one, the topic cannot be deleted as Sunagawa claims. In addition, it seems that if the sentence predicate indicates appearance of a new event in the text, the topic cannot be deleted: With the predicate "*mitsukeru* ('find')" or "*kanjiru* ('feel')" the topic cannot be deleted.

Another point we should note is that the topic deletion rules vary according to the type of text. If the composition is the manuscript for a speech, some deictic expressions such as "*watashi* ('I')" can be easily deleted even though they do not have an anaphor in the text. In addition, the student's native language affects his/her deletion of the sentence topic/subject. For example, a Spanish-speaking student in the investigation always deleted the subject of passive sentences, even though this is not preferable in Japanese.